

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00839

研究課題名（和文）遊女にみる中世身分集団の解体と再編

研究課題名（英文）The Disintegration and Reorganization of Status Groups in the Middle Ages as Seen through Courtesans

研究代表者

辻 浩和（TSUJI, Hirokazu）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70735513

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 400,000円

研究成果の概要（和文）：遊女のあり方は中世から近世にかけて大きく変化する。その画期は15世紀後半から16世紀における遊女集団の解体にあることが見通されているが、変化の内実については明らかにされていない。そこで本研究では15・16世紀の奈良を対象として、遊女屋の経営形態とその社会的位置づけの変容を分析した。本研究は遊女社会の変容と再編成過程の解明を通して、中世から近世に至る身分制の変容過程を単に政策的なものとしてではなく、社会的な基盤と広がりをもった動向として描き出そうと試み、遊女屋の動向や競合者、客層、都市権力・都市住民など多様な視点から、遊女屋の排除と遊廓の形成に至る過程およびその背景を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)本研究は従来権力側の都市政策としてのみ論じられてきた遊廓形成を遊女および遊女屋の側からとらえ直すことにより、遊廓の形成を中世から連続的に理解することに成功した。(2)また遊女屋の排除と遊廓の形成が広く都市住民や女性に関わる問題であることを指摘し、遊廓形成の社会的な影響の大きさを明らかにした。(3)中世身分制論にジェンダー視点を導入した点でも学術的な意味を有する。(4)本研究が明らかにした奴隷的な遊女屋経営の構造は、近世・近代へと継承され、ホモソーシャルな社交や「慰安婦」問題など、性に関わる種々の深刻な社会問題の土壌をなしていく。本研究の社会的意義はその歴史的起点を明らかにした点に存する。

研究成果の概要（英文）：The nature of courtesans underwent significant changes from the medieval to the early modern period. It is observed that the turning point lies in the disintegration of courtesan groups from the late 15th to the 16th century, although the specifics of these changes remain unclear. Therefore, this study focuses on Nara during the 15th and 16th centuries to analyze the transformation in the business structure of brothels and their social positioning. Through this analysis, the study aims to elucidate the process of transformation and reorganization within courtesan society, depicting the changes in the status system from the medieval to the early modern period not merely as policy-driven but as movements with a broad social foundation and spread. The study examines the exclusion of brothels and the formation of pleasure quarters from various perspectives, including the trends of brothels, competitors, clientele, urban authority, and urban residents.

研究分野：日本中世史

キーワード：遊女 遊廓 身分制 都市権力 都市史 ジェンダー史

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、本研究開始以前、中世身分制研究の一環としての遊女史研究の重要性を見出すと同時に、中世遊女の実態を示す史料の発掘にもつとめてきた。博士論文を基礎とした著書『中世の遊女』(京都大学学術出版会、2017)においては中世遊女の身分と集団に関する分析を行い、以下の2点を明らかにした。

(1) 中世遊女の特質は、遊女自身が経営権をもつこと、遊女たちが排他的な集団を形成し女系再生産を行っていること、の2点に求められ、15・16世紀にはこうした中世的な遊女の実態が崩壊し、近世的な遊廓社会の形成に向かうこと。

(2) 中世遊女は需要に合わせて複数の職能を使い分ける流動性を持っており、従来のように単一の職能、および職能に基づく権力との関係からでは集団の展開を十分に明らかにしえないため、集団側に即した視点からの分析が必要なこと。

本研究が15・16世紀における中世遊女集団の解体と再編成を問題としたことは上記(1)の、集団側の視点からこうした再編成をとらえ返そうとした点は上記(2)の成果を踏まえている。一方で上記の著書は13世紀における遊女の生業構造の転換を主たる論点としていたために、中世遊女集団の終焉からその特質を見出そうとする視点は薄かった。この反省が、「15・16世紀における遊女集団の変容」という本研究の着想につながった。

その後、代表者は国立歴史民俗博物館基盤共同研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」2016-2018年度(研究代表者:横山百合子)国際研究集会「買売春と社会:日本中世から近代まで」パネリスト(2018年)国立歴史民俗博物館2020年度企画展示「性差(ジェンダー)の日本史」展示プロジェクト委員(2018-2020年度)などの活動に参加することで自らの遊女社会論、身分集団論を通史的な視点から位置付ける機会を与えられた。とりわけ、近世においては遊女屋経営者が遊女の身体を「財」として物権化し、その収益に多くの人々が吸着していたこと、その構造が形を変えて近現代まで連続していることへの理解は、遊女が物権化され始める15・16世紀遊女社会の変容を解明する必要性の自覚につながり、本研究の直接的なきっかけとなった。

一方、代表者はこの間、遊女以外の身分論・集団論に関する研究を進め、辻浩和「身分と集団から中世社会を考える」(秋山哲雄ほか編『増補改訂新版 日本中世史入門』勉誠出版、2020)などを著すなかで、集団側の事情に即した身分論の必要性を一層感じるようになった。またこうした集団側の視点は、とりわけ集団の分裂・解体・連合・統合といった変容の側面において有効に機能することも自覚するようになった。

以上から、本研究では、15・16世紀における遊女社会の変容を明らかにした上で、そのことが遊女社会と権力・地域社会との関係性に与えた影響の解明を課題とするに至った。

## 2. 研究の目的

本研究では、下記(1)・(2)の研究課題を設定することにより、15・16世紀において、自立的な中世遊女から男性経営者に従属する近世遊女への転換がどのように起こるのかを明らかにし、中近世移行期における身分再編成の解明に資することを目指した。

### (1). 経営主体や再生産方法など、遊女集団のあり方の変容を明らかにすること。

中世の遊女は自ら経営権をもつ自営業者であり、相互扶助的な職業集団を形成していた点に特徴がある。遊女の仕事は性売買のみならず芸能や宿泊業をも含み込んで複合的に営まれるものであり、「家業」として母から娘へと女系で相伝されたため、外部から女性が流入する例はほとんど見られない。しかし15世紀後半から16世紀にかけて、誘拐・人身売買によって遊女集団の外部の女性が遊女屋に集められる事例が散見されるようになる。これは中世的な遊女集団の崩壊と、女系相伝による再生産の終焉を意味している。こうして集められた女性たちは男性の遊女屋経営者に従属して性売買を行っていたとみられ、近世遊廓社会に連続する存在と考えられる。以上の点からは、遊女屋にかかわる女性の誘拐・人身売買こそが、中世遊女集団の崩壊と、男性遊女屋経営者による新たな集団形成を示す徴証であるとみなされる。したがって、15・16世紀における女性の誘拐・人身売買事例を蒐集し、そうした行為に関与した人々の実態とネットワークについて明らかにすることが、本研究の第一の課題である。

### (2). 遊女集団側の変容に伴う、権力や地域社会との関係変容を明らかにすること。

16世紀になると、検非違使とその流れをくむ久我家が「洛中洛外傾城局公事」を徴収するようになる。この場合に公事の賦課単位とされているのは遊女ではなく遊女屋であり、ここには(1)で述べた遊女社会の変容に対応して男性遊女屋経営者を再編成していった都市領主の姿がうかがえる。さらにこの時期には、都市社会の中に遊女屋を排除する動きがみられ、そのことが16世紀末の遊廓形成、および女性を町女と遊女に2分する社会的な意識形成の基底をなすものと見通されている。以上の点を踏まえると、遊女集団の変容が都市権力や地域社会との関係にどのような影響を与えたのかを具体的に解明することが、遊女屋集団の再編成と近世への連続性を考える上で重要である。したがって、15・16世紀における遊女屋の政治的・社会的位置づけとその変容を明らかにすることを、本研究の第二の課題とする。

上記(1)・(2)の課題の解明によって、本研究は以下の3つの目的の達成を目指した。

中世身分制の解体と近世的な再編成が進む戦国期から中近世移行期への連続と断絶の様相を、具体的な集団に即して実証的に検討し、中世身分制の特質を明らかにすること。  
中世身分集団の変容過程を具体的に解明し、当時の集団が置かれた社会的環境と課題を把握することで、集団側が高次権力の関与を求める主体的な動向を理解すること。  
上記を通して、中近世移行期における身分制の再編成を権力側と集団側の双方からとらえることで、そうした動向を単に政策的なものとしてではなく、社会的な基盤と広がりをもった動向として把握すること。

### 3. 研究の方法

上記(1)、(2)の研究課題に向けて、15・16世紀の奈良を主たるフィールドとし、以下～の具体的な分析を通して総合的に考察を進めた。奈良をフィールドとするのは、中世から近世にかけて継続的に遊女屋の存在が確認でき、また領主側・都市社会側の史料から立体的に当該期の社会構造を描き出すことが可能であることによる。

#### (1)で掲げた遊女集団の存在形態の変容を解明するため、下記の作業を行った。

奈良における女性の誘拐・人身売買事例を蒐集し、そうした行為に関与した人々の属性、遊女屋への売買経路について明らかにした。予備的調査によって、当該期の奈良では手搦の焼餅売りの女性が女性を誘拐して今辻子の傾城屋に常習的に売り飛ばしていた事例が判明している。そこで本研究では、都市領主である興福寺の引付(興福寺所蔵『大乘院家御坊中集会引付』、内閣文庫所蔵『寺院細々引付』、春日大社所蔵『学侶引付写』、野上記念法政大学能楽研究所寄託『興福寺官符衆徒集会引付』など多数)を中心にして検断事例から同様の事例を蒐集し分析した。あわせて、検断に直接かかわらない立場から書かれた『春日社記録』(春日大社・内閣文庫等所蔵)等の古記録類を用いて、風聞記事についても蒐集を行った。

#### (2)で掲げた遊女集団と権力・地域社会との関係変容を解明するため、下記の作業を行った。

14～16世紀の奈良における遊女屋の検断・破却に関する事例を蒐集し、15・16世紀になると遊女屋に対する抑圧的な対処が強まることを確認したうえで、それらが都市共同体からの排除とどのように関係するのかを解明した。刊本による予備的調査では、文明期以降に遊女屋の破却記事が格段に増える。また検断が博奕とセットで行われている例が多く、都市社会の治安維持と関係があるものと予想された。そこで本研究では、都市領主の側から書かれた未翻刻資料の活用によって上記の予想を通時的に確かめることを目指した。

遊女屋の把握と賦課の方法を分析し、15・16世紀の都市領主と遊女社会との関係再構築にかかわる実態を明らかにした。これは遊女社会の変容を社会構造と関連付けて考察するためのもっとも基礎的かつ重要な作業である。代表者のこれまでの遊女研究を踏まえ、中世前期遊女集団との違い、および16世紀京都の遊女屋把握との比較を軸に重点的に考察を進めた。

### 4. 研究成果

#### (1)で掲げた遊女集団の存在形態の変容に関して、下記のような成果を得た。

15世紀前半に京都および奈良の都市中心部に遊女屋が進出し、爆発的に増加していることを明らかにした。こうした遊女屋の増加は当時の都市復興とかかわるもので、様々な新興業者が利潤を求めて遊女屋経営に参入していった様相を論じた。彼らは16世紀には遊女屋経営の独占と新興業者の排斥を行うために遊女屋集団を形成していくこととなる。

新興業者の爆発的増加を支えたのは、応永の飢饉などによる困窮女性の大量供給、および暴力的な拉致・勾引・人身売買であり、この時期以降、さまざまな階層の女性たちが遊女として性売りに従事することとなった。このことは、遊女が世襲的な「身分」ではなく、女性たちが一生のうちの特定期間に経験する「状態」となったことを意味する。

上記のような新興業者の爆発的増加に対して、検非違使という庇護者を失っていた旧来の遊女集団は対抗することができず、遊女自身が世襲的、かつ自営業的に経営を行う遊女屋の在り方は壊滅に向かう。

上記のように、15世紀前半に中世的な遊女のありようが崩壊し、遊女屋経営者に奴隷的に従属する近世的な遊女のありようが成立していくことを解明した。

#### (2)で掲げた遊女集団と権力・地域社会との関係変容に関して、下記のような成果を得た。

遊女屋集団の形成過程において、遊女屋は営業権の保証と新興業者への優位性確保を意図して都市権力にコミットする傾向がみられた。この動向は遊廓形成に至る過程においても継続しており、競合他社への対抗上、遊女屋集団が主体的に遊女屋の隔離政策に応じていることが判明した。近世の遊廓社会が幕藩権力と遊女屋集団との関係を基軸に展開することは、こうした関係性の帰結として位置づけられる。

また、遊女屋の排斥に関しては、都市民衆の関与も大きい。従来の研究で、16世紀末の都市民衆たちが求めていたのは流動化・治安悪化に対する対策であり、そのための政策として被差別民や武士奉公人などの排斥・強制移動が進められたとされてきたが、本研究では、遊女屋排斥もその一部であることを示した。遊女屋における客同士の喧嘩の頻発、および誘拐・人身売買事件の多発が遊女屋のイメージを悪化させ、京都、奈良、村落などさまざまな地域で地域共同体からの遊女屋排除が目指されたのであり、こうした動きの帰結が遊廓形成に他ならないことを論じた。

**以上のような成果により、本研究は中世遊女集団の崩壊から遊女屋排斥、遊廓形成に至る過程を連続的に把握し、かつその動向を集団側・都市民衆側から位置付けることに成功した。**このことは、遊廓形成を近世都市権力側の政策として論じてきた従来の研究に対する、本研究の独自性を示している。

本研究にかかわる具体的な成果のうち、既発表分は下記のとおりである。なお、これらに加えて、今後出版予定の論文・一般書等に本研究の成果は反映される予定である。

【論文等】

- ・「中世後期の遊女屋をめぐる社会観念」(『国立歴史民俗博物館研究報告』235、2022)
- ・「京都・奈良における遊女集団の展開と権力」(『歴史学研究』1028、2022)
- ・「遊女史料としての『和泉往来』四月往状」(『梁塵 研究と資料』34、2022)
- ・「鎌倉期の春日若宮と遊女集団」(『能と狂言』21、2023)
- ・「異形と懸想 鎌倉期の春日若宮におけるセクシュアリティ」(『Antitled』3、2024)
- ・「東海道の宿と遊女」(生駒孝臣編『中世東海の黎明と鎌倉幕府』吉川弘文館、2024)

【口頭発表】

- ・親鸞と中世被差別民に関する研究会「中世身分論の研究動向」(2021年12月6日)
- ・歴史学研究会中世史部会大会準備会第1回「都市における遊女集団の展開と権力」(2022年2月5日)
- ・日中韓女性史国際シンポジウム「東アジアのセクシュアリティ」パネル報告「日本中世における遊女と客の関係性：その変容に着目して」(2022年3月26日)
- ・歴史学研究会中世史部会大会準備会第2回「京都・奈良における遊女屋の展開と都市権力」(2022年4月2日)
- ・歴史学研究会中世史部会大会準備会第3回「京都・奈良における遊女屋の展開と都市権力」(2022年5月1日)
- ・歴史学研究会中世史部会大会準備会第4回「京都・奈良における遊女屋の展開と都市権力」(2022年5月28日)
- ・歴史学研究会中世史部会大会「京都・奈良における遊女屋の展開と都市権力」(2022年6月5日)
- ・2022年度 能楽学会 世阿弥忌セミナー「鎌倉期の春日若宮と遊女集団」(2022年9月4日)
- ・国際日本文化研究センター共同研究「ソリッドな無常/フラジャイルな無常」第7回研究会「遊女の 移ろいやすさ をめぐって」(2022年11月27日)
- ・Antitled 友の会 第2回研究大会「異形と懸想 中世春日社周辺の性暴力」(2023年9月1日)

【アウトリーチ活動】

- ・取材協力「日本史アップデート 遊女・遊郭と「性差(ジェンダー)」」(読売新聞夕刊 2021年11月9日)
- ・エッセイ「性差の日本史」展にかかわって」(『女性史学』31、2021)
- ・取材協力「14色のペン：自立した存在から「商品」へ 遊女への蔑視はなぜ広がったのか」(毎日新聞web版 2022年10月20日)
- ・平塚市中央公民館 平塚市中央公民館連続講座「復曲能『大磯』を学ぶ」第2回「遊女としての虎」(2022年12月22日)
- ・朝日カルチャーセンター名古屋教室「中世の遊女～その仕事風景」(オンライン(zoom) 2023年7月25日 - 2023年9月27日)
- ・朝日カルチャーセンター名古屋教室「中世の遊女～遊女をとりまく人びと」(オンライン(zoom) 2023年10月25日 - 2023年12月27日)
- ・朝日カルチャーセンター名古屋教室「遊廓の形成」(オンライン(zoom) 2024年1月24日 - 2024年3月27日)
- ・史学科特別講義「中世奈良の遊女と遊女屋」(奈良大学文学部史学科、2024年1月22日)
- ・人権・同和問題職場研修会「中世遊女の仕事と身分」(島根県立古代出雲歴史博物館、2024年2月20日)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 辻浩和	4. 巻 1028
2. 論文標題 京都・奈良における遊女集団の展開と権力	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻浩和	4. 巻 235
2. 論文標題 中世後期の遊女屋をめぐる社会観念	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 165-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻浩和	4. 巻 34
2. 論文標題 「遊女史料としての『和泉往来』四月往状」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 梁塵 研究と資料	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻浩和	4. 巻 21
2. 論文標題 鎌倉期の春日若宮と遊女集団	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 能と狂言	6. 最初と最後の頁 126-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻浩和	4. 巻 3
2. 論文標題 異形と懸想 鎌倉期の春日若宮におけるセクシュアリティ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Antitled	6. 最初と最後の頁 71-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 8件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 遊女の 移ろいやすさ をめぐって
3. 学会等名 国際日本文化研究センター共同研究「ソリッドな無常 / フラジャイルな無常」第7回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 鎌倉期の春日若宮と遊女集団
3. 学会等名 2022年度 能楽学会 世阿弥忌セミナー (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 京都・奈良における遊女集団の展開と権力
3. 学会等名 2022年度歴史学研究会大会中世史部会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 京都・奈良における遊女集團の展開と権力
3. 学会等名 2022年度歴史学研究会大会中世史部会第4回準備報告会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 京都・奈良における遊女集團の展開と権力
3. 学会等名 2022年度歴史学研究会大会中世史部会第3回準備報告会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 京都・奈良における遊女集團の展開と権力
3. 学会等名 2022年度歴史学研究会大会中世史部会第2回準備報告会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 中世身分論の研究動向
3. 学会等名 親鸞と中世被差別民に関する研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 都市における遊女集団の展開と権力
3. 学会等名 2022年度歴史学研究会大会中世史部会第1回準備報告会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 日本中世における遊女と客の関係性：その変容に着目して
3. 学会等名 日中韓女性史国際シンポジウム「東アジアのセクシュアリティ」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 辻浩和
2. 発表標題 異形と懸想 中世春日社周辺の性暴力
3. 学会等名 Antitled友の会 第2回研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 国立歴史民俗博物館、「性差の日本史」展示プロジェクト	4. 発行年 2021年
2. 出版社 集英社インターナショナル	5. 総ページ数 224
3. 書名 新書版 性差の日本史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------